

まずやってみて次の手を—政権交代を展望する—

広兼主生 「新時代」 1993.4.15 第 245 号

### 【一】

第七回臨時党大会は新規約を採択し『マルクス・レーニン主義』の時代は終わった』と宣言した。これは誠に重い決定で、私の周囲の同志間でもその解釈は様々である。

私は二年ほど前、「偉大なマルクスやレーニンもすでに歴史的存在となった。その卓越した学説も時代を超えて通用しえない。」と本誌コラムに書いた。だが、ふり返れば十年近くも前により斬新な意見はすでに出会っていた。

「発達した資本主義国における革命の問題は、マルクス、レーニン、スターリン、毛沢東の系譜では、未解決の問題である。先進的な資本主義国に住むわれわれは、その革命過程を模索しながら、自由と民主主義の問題の創造的解決を迫られているのである」(『労働運動研究』八四年九月号「独裁とヘゲモニー」佐和慶太郎)。そこにではプロ独裁に代わるグラムシ、トリアッティの「知的道徳的ヘゲモニー」を基礎とする民主的な社会主義像が探求されている。

もちろん党内外に早くからグラムシやローザ・ルクセンブルクを評価する立場からの意見も多かったが、この前年に起きた大韓航空事件についてさえ党全国委の一致した評価が得難い状況の当時、共産主義者として「マルクス、レーニン……の系譜」と距離を置いての明確な立論は卓見であった。

マルクスの天才的学説は、実験室で初期資本主義のエキスを分析して標本にしたような貴重な教材である。この偉大な教典も、そのまま次元の異なる現代の生きた政治的・社会的指針とはなりえない。これはレーニン主義や毛沢東思想についても同様だ。これを取り違えると『事実は真理の敵だ』と嘆くことになってしまう。

冷戦は形を変えた第三次世界戦争だったと言える。四十年以上も続いた戦いが終わり、世界はいま新たな戦後を迎え、戦中と異なる新秩序、東西対立に代わる新時代に移行しつつ、その陣痛に喘いでいる。民族抗争、宗教対立等々いっきょに噴出した諸矛盾の交錯するなかで、帝国主義の世界支配も「国連中心主義」のベールの下で再編成されつつある。

### 【二】

すべての政治組織は、基本的に、それぞれの階級的利益を代表しているが、現代の「民主政治」は、当然のことながら広汎な世論に依拠せざるをえない。したがって大衆的支持が政党の生命であり、「大衆との結合」はどんな党にとっても重要なのである。国民は決して『衆愚』ではなく同時に賢者の集まりでもない。そこに代議制を原則とする近代政党の役割があり、ヘゲモニー争奪戦がある。そしてしばしば「金と権力」が介在することも……。

わが国の政治・経済・社会全般にわたる民主的改革を求めるとき、その第一歩として、一党独裁にも等しい自民党政権の力を弱め、さらにその打倒を目指すのは当然だ。が、それは多様な政治勢力の協力共同を抜きにしては不可能だ。

だが、それぞれの政治的力点も時間と共に動く。「左翼」の場合、長らくその根底にあった“親ソ・反米”は消え、安保、自衛隊、原発さらに **PKO** も条件つき容認に移りつつあり、改憲問題さえタブーでなくなった。反核、反安保、反独占人民解放を掲げ続ける私たち共産主義者との落差は大きい。それでも尚、反自民統一戦線という戦略目標に献身することは当面の重要課題だ。

「難題だが、今この多様な運動、理論、異質な経験を包容し、統一を探る英知と粘っこい活動が

求められるとき」(本紙三月号、火花)であろう。

古い話で恐れ入るが、三十数年前、日共の「綱領論争」で、当時の構造改革論を宮本派は「なし崩し革命論」だと攻撃した。革命を食うか食われるかの決闘ととらえるか、民主的改良の積み上げに求めるか。古くて新しい問題だ。周知のように日共はやがて方向転換するが、「なし崩し」路線に不可欠な統一の思想やそのための妥協や寛容さを日共に求むべくもなく一層孤立化を深めている。まさに「他山の石」だ。

問題は、新しい政治的潮流が有力な反自民勢力を創り出し、仮に「政権交代」が実現したとしても、それが直ちに民主的革新の推進力となるかどうか、それは予測できない。だが、いまは先ずやってみて次の手を考えると云うことである。

終わりに、私ごとで恐縮ですが、全国委の末席を汚しながら長期療養のため皆様にご迷惑ばかりおかけしており、心からお詫び申し上げます。